

Kinetics of circulating damage-associated molecular patterns in sepsis

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2015-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三木, 隆弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001662

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1565 号

Kinetics of circulating levels of damage-associated molecular patterns in severe sepsis: a pilot study

(重症敗血症における DAMPs レベル動態：予備的研究)

三木 隆弘 (みき たかひろ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

敗血症における重症度の評価は、予後予測や治療の介入開始のための重要なステップである。そのため様々なバイオマーカーが用いられてきたが、未だ確立したものはなく、バイオマーカーの研究は進行中である。本研究の目的は、重篤な敗血症でダメージ関連分子パターン (DAMPs) レベル動態を明らかにし、新しいバイオマーカーとしての DAMPs 測定の有効性を評価することである。発症時期が明らかな重症敗血症 30 例を対象とし、既存の重症度評価に用いられてきたバイオマーカー (インターロイキン 6 とプロカルシトニン) とともに、血中に循環するヌクレオソーム、ヒストン H3 と HMGB1 レベルを測定した。測定間隔は発症した日を Day 0 とし、Day 1、Day 3、Day 7 の 4 ポイントで測定をおこなった。同時に重症度の指標に SAPS II スコアを算出し、転帰を 28 日転帰で生存群、非生存群で分類し比較をおこなった。30 例中 20 例が生存し 10 例が死亡した。インターロイキン 6 とプロカルシトニンの血漿レベルは、Day 0 (敗血症の発症の日) と Day 1 でピークとなり、SAPS II スコアは高値を持続したにもかかわらず、その後急速に減少した。対照的に血中の循環 DAMPs レベルは、より長い期間の高値を呈し、特にヒストン H3 のレベルは Day7 までの期間の全体を通じて高値であった。そして、非生存者は生存者に比べ Day 3 と Day 7 でより高いピーク値を示す傾向があった ($p<0.1$)。血中に循環する DAMPs レベルの測定は、敗血症の重症度を評価するために、従来から用いられてきた指標よりも有用であることを示唆する結果であった。しかし本研究は予備的研究であるため、今後もさらなる検討を必要とする。